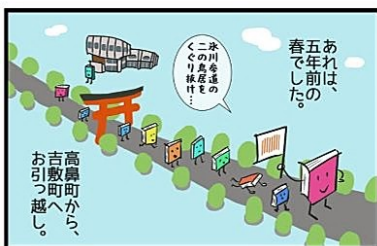


あれから五年これから五年



大宮図書館 ホームページ
大宮図書館 X(旧Twitter)
Xではイベントやスタディーコーナーの持ち人数など大宮図書館の情報を日々ポストしています。ぜひ、フォローしてみてくださいね！
この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから引用しています。

大宮20 謙信の伝説を伝える
景元寺



街でみかけたローマン体

参考文献
『文字講座』浅葉克己ほか／著 文字講座編集委員会／編
誠文堂新光社 2009年
『欧文書体』その背景と使い方「新デザインガイド」小林章／著
美術出版社 2005年
『欧文書体百花草』組版工学研究会／編 朗文堂 2003年

「すべてのローマン体大文字の源」とされる記念碑が、現在でもローマに残されている。
今から2000年ほど前、古代ローマ帝国トラヤヌス帝が「大石に文字が彫られており、平筆の下書きをもとにしているため、やわらかな彫りや豊かな抑揚を持つ。ローマにはたいていこの碑文があるの、なぜ「トラヤヌス帝の碑文」だけがすべてのローマン体大文字の源とされるのか。その理由は文字の完成度の高さと、文字配置のバランスが抜かずに残っていること。さらに、当時存在した23文字のアルファベットのうち19文字が記されていることだ。ここから破損せずに残っている碑文はほとんどなく、ルネサンス後期から現在に至るまで模倣と検証が繰り返されて2000年もの間、多くの活字書体の礎となってきたのだ。
16世紀の筆記官クレッシンによる研究や、19世紀のエドワード・カティチによる拓本から全ての文字を検証し正確な線画で起こした調査などが、現在でも使われるフォントの書体の誕生につながっている。
心奪われる欧文書体の印刷物に出会ったとき、かつては手で書かれ、石に刻まれ、金属に刻まれてきた文字の歴史に思いを馳せると、また感じる美しさが変わるかもしれない。



「ローマン体」という書体を「ご存じだろうか。アルファベットのタイポグラフィの先端に突起(セリフ)のついた書体よく目にする活字のことである。」

おなかへった

突然ですが、ご近所のお散歩や旅先で、素敵なお家に出会うことはありませんか？こんな庭先でお茶の時間が持てたらなんと癒されることだろう、と思う時があります。ところが最近では植物に占拠された空き家を目にすることが多くなり、かつてはここにもそんな時があったのかな、とせつない気持ちになることがあります。

そんな「空き家問題」を軸にストーリーが展開されるという触れ込みのこの本に興味津々で読み始めると、「マダムのお茶会？何?!空き家のお話じゃなかったの?」と思いつつ、アフタヌーンティーという私には未知の世界(臉を閉じて、三段重ねのティースタンドにカフルに並ぶケーキやマカロンにサンドイッチ、そして琥珀色の紅茶を思い浮かべる。いずれ体験せねば。)に心惹かれたと思ったら、突然ちよつと怪しげな雰囲気。並行するように空き家問題にもギョッ、どきッ、ゾワッ……。まんまと惹き込まれていきます。

かつて生活があり大事にされてきた家。その主を失った時に、残された人たちはどの様に対処していくのか。そんな中でも、推し活仲間と遊園地のフードコートでプチ宴会の様相……。70代になっても楽しそう!

ストーリーも気になるが、次々に出てくる食事のシーン。コンビニのマリトツツオ(今は見かけることがなくなってしまっただけ残念)やら息子の作る参鶏湯(さむげたん)風スープなどなど、ちょっと想像がつくだけに余計におなかが減ってしまします。空き家問題と食事風景がどのように繋がるのか?

親しい人と一緒に食事の時間を持つということは楽しい、と思える一冊です。

紹介した本
『カモナマイハウス』
重松清／著 中央公論新社
2023年



わたしのきなえほん

わたしは、絵よりもお話が好きな子どもでした。絵本の時代を光の速さで通り抜け、松谷みよ子の『モモちゃん』シリーズなどにハマっていた園児のわたしは、字よりも絵の方が多い本などコードモが読むものだと思っていたのです。

二歳下の弟は、もちろん絵本が好きでした。『ひとまねごころ』に夢中です。当時の私はコードモだなぁと思いながらも、試しに読んでみることにしました。

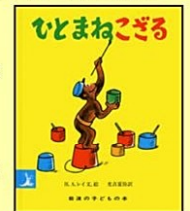
しりたがりやの、おさるの「じょーじ」。動物園のぞうさんの大きな耳の下で眠るちいさなじょーじが可愛くて、何度もうながめました。この世にはお話以上に絵が楽しい本もあったのです!

別のページではなんと、じょーじが鍋いっぱいスパゲッティを食べようとして、スパゲッティでぐるぐるまき!……しかし実をいうと、わたしが最初に読んだ絵本には「スパゲッティ」という文字がありませんでした。そこには「うどん」と書かれていたのです。昭和40年代、わたしは子どもはスパゲッティが大好きでしたが、私の祖父より年上の翻訳者(光吉夏弥、明治37年生まれ)は「うどん」じゃないと子どもたちに通じないぞ!と思ったのでしょう。

いま大宮図書館にある『ひとまねごころ』でじょーじが食べているのは「スパゲッティ」です。そんなことに気がついたのはもちろん、図書館で働き始めてからでした。

幼い日に読んだ絵本と大人になってから再び出会い、何かを発見する。これもまた、長い生命を持つ古典的名作の面白さ、かもしれません。

紹介した本
『ひとまねごころ』エッチ・エイ・レイ／文・絵
光吉夏弥／訳 岩波書店 1980年
『ひとまねごころ 改版』H.A.レイ／文・絵
光吉夏弥／訳 岩波書店 1998年
参考文献
『光吉夏弥 戦後絵本の源流』澤田精一／著
岩波書店 2021年



読書バトン

第14回 テーマ『愛情』

サリール・ルーニーの『カンパセーションズ・ウィズ・フレンズ』には多様な愛情が登場します。タイトルにあるように友人間の愛情であったり、同性同士の愛情であったり、親と子、家族間の愛情であったり。物語の主軸となるのは、古典的な男と女の愛で、有り体に言えない不倫の物語です。若い女性が中年の既婚男性に惹かれていく、という。このように紹介すると読者を限定してしまうような気がしてなりません。恋愛小説という手を出さない方もいらっしゃるかもしれませんが、普段は惹かれるジャンルではないのですが、それでもこの作品に興味をもったのは理由があります。それは、著者ルーニーが現代を代表する新進気鋭の作家である、ということ。それだけの理由で手に取った訳なのですが、読み終えた後には、この作家の著書をもっと読んでみたいと思ひ、すぐさま同じく日本語に訳されている『ノーマル・ピープル』も読みました。

どちらの作品にも共通する魅力は、著者が描き出す世界的な圧迫的なリアリティにあるように思います。

『カンパセーションズ・ウィズ・フレンズ』は、現代の理不尽で不平等な格差社会がありありと描き出され、その中で登場人物たちの関係性は物語が進むにつれ複雑化し、手に負えない場面にたてまします。ラストは納得できるものではなく、読後にはため息が出てしまいくしたくない今が鮮やかに表現されています。格差社会が広がりゆく中、読んでみてよかったと思える作品なりました。

ということで、今回のテーマは「格差」でお願いします。

紹介した本
『カンパセーションズ・ウィズ・フレンズ』
サリール・ルーニー／著 山崎まどか／訳
早川書房 2021年
『ノーマル・ピープル』
サリール・ルーニー／著 山崎まどか／訳
早川書房 2023年



参考文献
『大宮の文化財3』
大宮市教育委員会／編 出版
1987年
『埼玉ふるさと散歩 大宮市』
サンケイリビング／編
さきたま出版会 1980年